川崎市自閉児育親の会創立20周年
記念誌 くさぶえ
1998. 6. 28. 発行

自閉症の人の内と外を考える

小　林　隆　児　先生

東海大学健康科学部社会福祉学科

はじめに

今日お話するタイトルは「自閉症という障害をもつ人の内と外を考える」としていますが、少し説明しないとわかりにくいかもしれません。人の内と外というのは、実はコミュニケーションの構造と関係しています。人間は常に人と関係を持ちながら生活しています。そこでは常にコミュニケーションというものが繰り広げられています。自閉症という障害は人と関係がうまくもてない、関係の基本となるものがうまくできていかないところに最大の特徴がありますから、コミュニケーションの障害は深刻なものです。私は自閉症の最大の問題は自閉性にあると考えています。自閉性は言葉を換えていえば、コミュニケーションの問題ともいうことができます。

コミュニケーションというものを考えてみてください。AとBという二人の間のコミュニケーションを想像してみてください。AがBに何かを伝えたいとします。Aにコミュニケーションをとろうとする際のある意図があります。それを言葉という文化的道具を用いてコミュニケーションをとろうとします。言葉がコミュニケーションの道具になりうるのは、その文化において共通のある意味をその言葉が持っていることに因るわけです。Bはその言葉を聞くことによって刺激され、あるイメージが心に浮かんできます。AとBの間で共通のイメージが浮かべば、両者間のコミュニケーションはとてもうまく展開しているということになります。

ただここで考えてみて欲しいのです。このようなコミュニケーションの構造を見ると、Aの意図が実際に使用された言葉によってどれほど正確に表現されているのでしょうか。伝えたいと思っていること、実際の使用された言葉が有する意味（辞書に表現されているような一般的意味）、Bがその言葉を聞いて連想した内容の三つの次元を比較してみると、現実には各々の間には大なり小なり必ずずれが生じてしまうものです。このようなずれはいかに正確さを求めて慎重にコミュニケーションを図ろうとしてもかならずやつきまとうものです。本来コミュニケーションにはこのようなずれが生じてしまうという自己矛盾をもっています。

このように考えてみると、自閉症という障害を持つ人とわれわれがコミュニケーションを展開しようとした際にも同じようなことを考えてみる必要があると思うのです。そのようなことを考えてみたいと思って、今日はこのようなタイトルを考えてみました。

強度行動障害の治療で感じたこと

4年前に九州から関東に来て、いくつかの福祉施設で生活している自閉症の人たちの治療に関係する機会を持つことができました。そこで感じたことをまず話してみたいと思います。今日福祉施設で最も問題となっていることの一つが、強度行動障害の存在とそれに対する療育方法の検討です。九州ではみたことがないような凄まじい強度行動障害を呈する人たちが少なくないことに大変驚きました。その深刻さに最初は圧倒される思いでしたが、施設の職員と一緒になって治療に取り組んでいくと、非常に良くなるし、治療の中で多くのことを学ぶことができました。

強度行動障害の人たちの多くに共通する特徴に激しい自傷と他害があります。それらの行動を支配しているものとして強迫的こだわりが存在しています。大半の例ではこれらの行動障害が主たるもののように思います。これらの行動障害が生じてくる要因とそれに対する治療方法が考案されたら強度行動障害は随分と減少していくと思います。

彼らの自傷行為をみていますと共通のある特徴があるのに気づきました。職員の観察力に負うところが大きいのですが、本来ならば楽しいはずの行動をしようとしても自傷を起こすのには驚きました。食事をする時、寝ようとする時、トイレに行って排泄しようとする時などです。お分かりのように、われわれですと一番幸せな感じを抱く時ですね。ないしは一番ほっとする時です。でも彼らはそんな時にさえ激しく自分の身体をいじめてしまうのです。さらに驚かされたのは、職員の自分への関心がそれて他の人に行ってしまった時にも激しい自傷が起こることでした。職員が常に自分に関心を注いでくれていると感じていると落ち着いていても、ちょっと他の人が騒いだりして職員の注意がそちらに移ってしまうと途端に激しく反応して自傷を起こしてしまうのです。自閉症の人は他者とコミュニケーションを持つことに困難を持つ人ですから、人から関心を向けられることは好まないのではないかと素人判断したくなりますが、どうもそうではないのです。ほとんどの強度行動障害の自傷でこのような特徴が認められます。このような誘因がどうして彼らに自傷を引き起こすのか、そのメカニズムが分かれば強度行動障害の成り立ちはほぼ理解できるのではないかとさえ私は考えています。

これからの話の中でこのことに再度触れることになりますが、しばらく他のことに話題を移してみたいと思います。

自閉症をコミュニケーションの問題とみなしてみよう

自閉症という障害の中心的問題を自閉性、すなわちコミュニケーションの問題としてみようと先ほどお話しましたが、コミュニケーションの問題を考える時には、子どもの側のみを見ていては理解は深まりません。コミュニケーションはそもそも一人では成り立ちません。必ず相手が少なくとも一人は必要になります。つまりコミュニケーションの問題を考える際には、その当事者少なくとも二人を念頭に入れて考える必要があります。コミュニケーションは当事者双方の問題なのだという基本的認織をもってもらいたいと思います。なぜなら昨今の自閉症への理解のあり方が、あまりにも子ども自身の障害にのみ焦点を当てすぎているきらいがあると思うからです。

自閉症では言語や認知の発達に重篤な障害が起こると言われています。実際にそうなのですが、多くの人たちは自閉症の人々とまったくコミュニケーションがとれないとは思っていないと思います。なんらかのコミュニケーションが生まれていると体験的には感じ取っていると思います。また自閉症の子どもたちの人を判断する目が驚くほどしっかりとしていて驚嘆することさえ少なくありません。自閉症の人に好かれる人に悪人はいないとまでいう人がいるほどです。ある人には好んで接近するのに、ある人には常に回避的になっていることも少なくありません。このように彼らも何らかのコミュニケーションをとろうとしていますし、実際に何らかのコミュニケーションが展開しているとみなしてもよいでしょう。ただはっきりと言えるのは、言葉を用いたコミュニケーションがとれない、部分的にはとれても話し手の意図は十分には伝わらないし、伝えることもできないことがほとんどです。

コミュニケーションの構造を考える

先ほどから自閉症の人とわれわれとの間のコミュニケーションについて考えているわけですが、コミュニケーションの質を考えてみると、大きく二つに分かれていることに気づきます。言葉を用いたコミュニケーション（象徴機能を用いた非言語的コミュニケーションも含みます）とそうでないコミュニケーションです。二人の人間がそこに存在したら必ずそこにはコミュニケーションが生まれます。積極的、生産的なコミュニケーションか否かは別ですが、お互いに何らかの影響を受けるという意味合いではそのように表現してもかまわないでしょう。ここで私はコミュニケーションの二つの種類を、以下次のように表現したいと思います。すなわち、前者を象徴水準のコミュニケーション（象徴的コミュニケーション）、後者を情動水準のコミュニケーション（情動的コミュニケーション）と呼びたいと思います。

この二つのコミュニケーションの質は大きく異なります。単に言葉を用いるか否かということではありません。情動的コミュニケーションの世界では言葉は本来必要としないものです。お互いの気持ちが通じ合うということです。「目と目で通じ合う」という誰かの歌の文句にもある世界です。ある快的な情動（感情と同じような意味として考えて下さい）ないしは不快な情動（勿論どんな情動でもいいのですが）を両者が共有しあう関係をいいます。しばらくこの情動的コミュニケーションがどのような性質のもので、それを可能にするのはどのような人間の能力によるのかを考えてみたいと思います。

情動的コミュニケーションについて考える

ある人に何らかの情動の変化が起こったとします。それが相対している他者にどうして同じ情動が感じられるようになるのでしょうか。考えてみれば不思議なことです。怒りの感情がAとBの間で共有される場合に、Aが「私は怒っているんですよ」と相手に伝えることはたとえあったとしてもそれによって初めてBが感じ取る訳ではありません。勿論感度の鈍い人に対してはそのように表現でもしないと伝わらないかもしれませんが、そのような場合には言葉で表現したからといって同じような情動が相手にわいてきているかというと疑問に思います。頭ではBも「わかった」というかもしれませんが、それは意識の世界でそうだと思っているだけかもしれません。情動が共有されるのは、例えば子どもを亡くした親の悲しみを目の前にした時に、思わずこちらももらい泣きしてしまうような場面を想像していただくと最もわかりやすいでしょう。

このようなコミュニケーションが可能になるのはどうしてでしょうか。このようなコミュニケーションはまるで二つの音叉が共振するようなものだとある哲学者は語っています。振動数の同じ音叉を二つ横に並べて一つを振動させると必ず他方の音叉も振動します。ほとんど同時に振動していきます。情動が二人の間で共有される場合も同じようなものだというのです。確かにそのような感じがします。ではどうしてそれが可能になるのでしょうか。

コミュニケーションが可能になるのは、人間の知覚機能に負うところが大きいことは容易に想像できます。言葉でのコミュニケーションを考えてみるとすぐに理解できましょう。そこでは聴覚という知覚が重要な働きをしますし、文字言語であれば視覚という知覚が働きます。では情動的コミュニケーションではどうなのでしょうか。

情動的コミュニケーションを可能にする知覚の特徴—無様相知覚—

乳児とその養育者（主に母親でしょうからここでは母親としてお話します）の間でのコミュニケーションはまさに情動的コミュニケーションそのものといっていいわけですが、乳児においてそれを可能にしているのは、乳児独特の知覚の働きがあるからなのです。それを無様相知覚といいます。具体的にはどのようなことをいうか説明してみましょう。

ある乳幼児発達心理学者が乳児を対象に有名な知覚実験をしています。乳児を仰向けに寝させて、おしゃぶりを口にしゃぶらせます。その際最初に乳児に目隠しをします。そのあとおしゃぶりをしゃぶらせるのですが、おしゃぶりには二種類のものが用意されています。ひとつは表面がなめらかなもの（一般的にはそのようなものですが）で、もう一つは表面がでこぼこでいかにも痛々しい感じを抱かせるようなものです。ふたつのどちらかのおしゃぶりを目隠しされた乳児の口にもっていきしゃぶらせるわけです。そしてそれを取ってから目隠しも外します。その後二つのおしゃぶりを乳児の目の前においてみます。するとさきほどしゃぶった方のおしゃぶりを好んで長く眺めることが分かりました。よく考えてみると不思議な現象です。おしゃぶりを乳児はしゃぶる前には見ていません。つまり視覚的にはどのようなものかは知覚していない訳です。触覚でもってしか知覚していないはずの物が視覚的にも同じ物だと認識できていることをこの実験の結果は示しています。この結果から分かったことは、乳児の知覚の特徴は、視覚、触覚、味覚、聴覚、嗅覚などといったわれわれにとっての五感のように知覚が一つ一つのモード（様相）には分かれておらず、先ほどの例でいえば二つの知覚（触覚と視覚）の相互間で共通の質の知覚が行われているということです。交叉様相知覚ないし無様相知覚と言われています。

他の例をお話します。アイドル歌手のコンサートにでも行けばすぐに分かりますが、会場での若い女性の甲高い歓声を想像してみてください。私はどうも苦手ですが、あのような声を「黄色い声」と表現することがあります。声に色がついているわけはありませんが、そのように表現します。言葉の世界ではこのような比喩的表現は無数にあります。このような表現によって言葉の世界は豊かになっているといっていいでしょう。黄色の色を見て感じ取るものと若い女性の歓声を聞いた時に感じ取るものとの間に共通の質を感じ取るからこのような表現をしているわけです。非常に刺激的で、鋭利な感じがしますし、人によってはいたく不快な感覚を呼び起こすこともあるでしょう。このような例も同じような知覚のあり方を示しています。

この会場ではできませんが、部屋によっては光の調整を段階的に行うことができるスイッチがついています。そのようなスイッチを急にひねって明かりを急に強くしていったり、急に弱

くしてみたとしましょう。コンサートが今まさに始まらんとする時には明かりが急に落とされます。その時にはわれわれの心は期待感で膨らんでいますからこちらの気持ちは益々ステージに注意が注がれるようになりますが、ある部屋に一人でいて急に明かりがこのように急に落ちていったらどうでしょうか。おそらくは何らかの不安な気持ちが引き起こされるでしょう。逆に心細い状態にあった時に明かりがゆっくりと強くなっていったとします。するとなんとなく安心感が生まれてくるでしょう。ないしは心もどことなく大きくなってくるのではないでしょうか。その逆に明かりが落ちていくと心も同時に収縮していくような感じになるのではないでしょうか。このような知覚のあり方は明かりを視覚的に知覚しているだけではありません。光が変化していくその動きの中に感じるものがあるわけです。このような知覚も無様相知覚ですが、特に力動感 vitality affect と称して区別されています。

今お話しました明かりが変化する際に感じ取ったある種の不安につながる感覚も同時に起こっていますが、このような知覚は相貌的知覚ともいわれるものです。わかりやすい例としては、仕事の帰りに人家のないような薄暗い夜道を一人で夜遅く帰宅の途上にあったとします。そんなときに少し先の路面に一筋の細長い物があったとします。そんなときにまるでそれが蛇であるかのように知覚してしまうことが起こります。よくよく見ると一本の縄であるにもかかわらず蛇だと知覚してしまうことは体験的によく分かるでしょう。そのようにある種の不安状態にあった時には一本の縄がまるで生き物、それも自分が恐れている蛇であるかのように知覚してしまうのです。このように知覚現象は主体の心理状態によっては生き生きとした感じのものとして知覚されます。このような現象を相貌的知覚といいますが、これから分かるように知覚現象はある物をいつも同じように知覚しているのではなく、主体の心理状態、ないしは生理状態の如何によってはいろいろと変化して感じ取られるのです。すなわち知覚現象は間主観的現象であるということができます。

これまでお話してきた知覚の特徴はすべて無様相知覚とされるものですが、このような知覚の仕方が存在するがために、実は情動的コミュニケーションは可能になっていくと考えられています。養育者がさりげなく、ないしは意図的に乳児に働きかける行動に対して、このような無様相知覚を鋭敏に働かせながら知覚しているとするなら、その実態を多少なりとも想像しやすくなるのではないでしょうか。

無様相知覚の世界の特徴

無様相知覚で捉えた世界はどのように主体にとって感じられるのでしょうか。このような知覚のあり方は諸条件によって容易に変化を受けることも想像できるでしょう。先ほど主体の心

理状態によって異なるといいましたが、その他にも、主体の生理的状態如何によってもその知覚の仕方は異なってきます。例えば好きな酒を飲み過ぎたとしましょう。すると目の前の箸やフォークが浮き上がって見えてくるといった体験はないでしょうか。二日酔いの状態で周りの世界を眺めていると、なんとなくどんよりとした感覚を感じ取ることもあるでしょう。風邪を引いた時には世界がなんとなく鬱陶しく感じられたりします。鬱状態になった時に電話の音が異常に大きく聞こえたり、さらには電話の音にある種の恐怖心を引き起こされることさえありましょう。主体の心身の状態と密接な関係のもとに無様相知覚は常に働いていることがお分かりいただけるでしょう。

自閉症の人たちの知覚はどのような特徴を持っているか

では自閉症の人たちの知覚にはどのような特徴があるのでしょうか。これまで多くの研究によって自閉症には知覚異常があることが認められています。知覚恒常性の異常などがその代表的な考え方ですが、これまでお話したことを振り返ると、われわれ健常者といわれる人たちでも知覚は常に客観的に一定したものではないことがお分かりでしょう。では自閉症の知覚を異常とみなせるのでしょうか。確かにわれわれのような知覚モードがきちんと機能分化しているかを考えてみると、視覚、聴覚、味覚、触覚などいずれにも自閉症独特な知覚の仕方はあるようにも思えます。しかし、知覚そのものが心身の状態如何によっていかようにも変化しうることを考えると単に彼らの知覚が異常だ、われわれの知覚のあり方とは異なるのだと単純に割り切ることはできないと思います。

私はこれまで自閉症の知覚の特徴をいくつかの論文で発表してきました。その内容は時間の関係で説明できそうにありませんが、結論を一言でいいますと、自閉症の知覚の特徴は乳児のそれと極めて類似しているということです。そのために世界の様々な刺激に対してわれわれの予想とは随分異なった反応をしているのではないかということです。

自閉症ではコミュニケーションがどうして成立しにくいのか

そろそろ自閉症のコミュニケーションにおける問題に入ってみたいと思います。自閉症の人とわれわれとの間ではどうしてコミュニケーションが成立しにくいのでしょうか。これまで多くの研究者が言語認知障害があるがためのその結果としてのコミュニケーション障害の存在を考えていました。果たしてそうなのでしょうか。私はこれまでの臨床研究の成果をもとに自分なりの考え方をこれからお話してみたいと思います。

カナーはもともと自閉症を情緒的接触の自閉的障害と称していました。すなわち情緒的なつながりが成立しないことを自閉症の基本的問題と考えていました。今日カナーの考え方に戻って考えてみようと主張する研究者もいくらか存在するのですが、私もやはり情緒的なつながりがどうしてできないのか、すなわち情動的コミュニケーションの成立がどうして困難なのかという問題を出発点にして考えを進めてみたいと思います。

自閉症における情動的コミュニケーションについて

なぜ自閉症においては情動的コミュニケーションがうまく深まっていかないのでしょうか。私はその一つの可能性として接近・回避動因的葛藤ということを考えています。接近・回避動因的葛藤とは動物行動学的概念です。わかりやすくいいますと、動物も人もなんらかの行動を起こす際には必ず動因（動機）があります。例えば他者に対して接近行動を取ろうとします。どんどんその人に接近していきますと次第に回避行動をとりたい動因が高まっていきます。逆に、ある人からどんどん遠ざかると接近行動をとりたいという動因が高まってきます。両者が中間的距離（あまり接近せず、かといってあまり遠ざからない距離にある状態）にあると、接近したい動因と回避したい動因が双方ともに強まってしまい、二つの動因が葛藤状態になってついにはかんしゃく反応を起こすというものです。自閉症によくみられるパニックをこのような接近・回避動因的葛藤によるものとして説明できないかと考えるわけです。

この概念は自閉症の行動様式、行動障害の成り立ちなどを考える上でとても有用だと思っています。私たちの対人関係の取り方をみてみると、通常一般的な関係の持ち方は自閉症でいえばパニックを起こしやすくなるような中間的距離をとります。言葉を用いたコミュニケーションの形態ではそのような対人的距離になります。どうしても自閉症の子どもの相手をしていると、つい同じような距離をもって交流を図ろうとするわけです。しかし、彼らにとってはそのような距離は接近・回避動因的葛藤を非常に強めますので、大変苦痛になるのが分かるでしょう。すると当然回避的になってしまうか、かんしゃくを起こすかどちらかの反応を示します。

自閉症と愛着行動

自閉症にも愛着行動が認められることが最近すこしずつ報告されるようになってきました。愛着行動とはなにか不安な状態におかれた時に安心感を求めて何かの対象に接近してすがりつく行動をいいます。日本語では甘える行動といってもいいでしょう。つい最近まで自閉症には愛着行動はみられないとみなされていましたが、現在では自閉症にも愛着行動は認められると考えられています。ただその質が異なるのではないかと考えられています。

先に述べた接近・回避動因的葛藤が強いと母子間でどのような関係の悪循環が起こるかといいますと、子どもが母親に接近してきたら抱きかかえようとします。でもそうすると子どもはすっと回避行動を取ってしまいます。回避しますからこちらが放っておくと子どもは再び接近してきます。このようにして悪循環がどんどん進展していくと永久に両者の間で親密な愛着関係が生まれにくくなるのはよくお分かりいただけるのではないでしょうか。

私はこのような母子間の悪循環を少しでも早く断ち切り、子どもと母親との間で愛着関係が深まるように工夫することが、自閉症治療において最も重要なことだと考えています。治療介入によって比較的容易に愛着関係は深まっていきます。愛着関係は、先ほどまで説明していました情動的コミュニケーションということと同じ内容を示しています。すなわち愛着行動が子どもの側に出現していくようにすることが情動的コミュニケーションを深めていくための最初のステップになるわけです。

関係性の障害と情動的コミュニケーション

話の初めにコミュニケーションは当事者双方の問題として考える必要があると強調しました。知覚の特徴を考えるとそのことはよく分かるのではないでしょうか。

私は自閉症を単純に脳障害を基本にした障害であると考える説にはどうも納得できないものを感じています。このようにいいますと、心因論を主張したいのかと必ず質問されます。器質論と心因論がこれまで多くの議論を沸き起こしたことはどなたでもよくご存じのことでしょう。人間の発達とその問題をどちらかを主たる原因とみなそうとする考え方はどちらもあまりにも単純すぎるように思えるのです。人間の発達を個体要因と環境要因の複雑な交互作用の蓄積の結果とみなそうとする発達観がやっと最近になってよく主張されるようになってきました。ここではたとえ脳に障害が存在しているとしても単純にそのような脳障害の結果として現在の行動上の異常があるとは考えず、個体要因と環境要因の交互作用の結果として脳障害が生じているかもしれないとも考えるわけです。たとえば先天性代謝異常の代表的な疾患であるフェニルケトン尿症の原因はある特殊な酵素欠損によって起こることはよく知られていますが、神経毒性をもつ中間代謝産物が体内に産出されないような特殊な食べ物を成長期に与えることでもってたとえ代謝異常は存在しても健康な発達が可能になることが分かっています。ここでは例え個体要因として酵素異常が存在していたとしても環境要因としての食事療法如何によっては健全な発達が保証されるわけです。

私はあくまで臨床家の立場で仕事をしていますので、臨床的立場から自閉症と考えられる病態をどのように考えて治療していけばよくなるか、その臨床知見に基づいてお話したいと思い

ます。その中で現在主張したいのは、自閉症をコミュニケーションの問題としてとらえ、関係性の問題という視点に立つことが治療を考える上でとても役立つと思います。子どもや養育者（治療者、療育者なども含めて）の関係に着目してみたいと思うのです。関係という言葉自体は使い古されているものなのでなかなかお分かりにくいかと思いますが、先ほどまでお話していたコミュニケーションの構造、性質を考えていただくと少しは理解いただきやすくなりはしないかと思います。両者の間にどのような現象が起こっているのか、それはどのような要因によるのかを考えてみようということです。

ある臨床例にみるコミュニケーションの実態

よくみかけるコミュニケーションの実態の例を列挙してみたいと思います。例えば、Ｓさんの例を取り上げてみましょう。Ｓさんのお母さんはＳさんとのあいだでとても忠実に一所懸命ことばでコミュニケーションを取ろうとしています。まるでことばがしっかりと話せて、理解もできる人に向かって話しているようにみえるほどです。Ｓさんも語れる数少ない言葉を何度も同じせりふで繰り返します。そのせりふに一所懸命応答しようとお母さんは努力されています。実はこのような場面はいつどこでも発見できるありふれた状況です。これまでこのような状態の自閉症児を説明する時には質問癖という専門用語が使用されていました。

施設の職員でとても感性豊かな方がＳさんのこのような言動に対して実にうまく対応し両者の間で情動的コミュニケーションがとても深まっていくことに成功しました。その要点は、言葉の意味に囚われないで、言葉をリズミカルに楽しい雰囲気で相手に投げ返したり、受け止めたりするようにしたということです。具体的には言葉を彼に投げかける時に大きさに変化を付けて次第に大きくしたり、小さくしたり、言葉をまるでボールのやりとりをするかのようにして交流を図るわけです。するとどうでしょう。Ｓさんはそのような対応によって実にうれしそうに喜々とした反応をし始めそれまでの相手に威圧感を与えるようなすごみが消えて両者の間でお互いに安心感をいだきながら交流が持てるようになっていったのです。勿論、これだけでもって両者の間がよくなったと単純にはいいきれません。彼の接近・回避動因的葛藤をいかに和らげるかに常に細心の配慮をしていったことは言うまでもありません。でもＳさんとのコミュニケーションを深める上で職員の工夫した点はとても重要なヒントをわれわれに与えてくれます。つまり、コミュニケーション、とりわけ情動的コミュニケーションを深めていく上で、自閉症の人たちが敏感に知覚する刺激要素をとてもよく捉えて対応していることが示されています。言葉のリズム、テンポ、動き、強弱の変化といった要素を実に鋭敏に知覚しているという無様相知覚の世界がそこには展開しているといえます。まさに情動の世界が展開しているわけ

です。

逆にそのお母さんの話し方を考えてみたいと思います。ずっと母子のやりとりにつきあっていますとお母さんの方がいらいらしてくるのが分かります。言葉をあまりにも杓子定規に用いて言葉の意味にのみ忠実に用いているがために、いわゆる言葉に遊びがなくなっています。どんどんとせき立てられるような響きさえ感じるようになっていきました。するとどうしても何かを言わないとおれないような気持ちにせき立てられてきます。Ｓさんがどんどんと同じような質問を繰り返すのも分かるような気がしてきます。コミュニケーションを言葉のやりとりといった視点のみから考えると、このような母子間のコミュニケーションの姿は実に不可解で自閉症の病理だと一方的に言いたくなりますが、自閉症の子どもの側のみの問題でこのようなコミュニケーションの歪んだ姿が生じているわけではないのです。そのお母さんが話している時に、お母さんの発している刺激、Ｓさんがそれに対してどのように知覚しているかを考えてほしいのです。言葉の一般的な意味だけではなく、言葉が発せられた音声に乗せられて発せられている刺激要素、すなわちリズム、テンポ、力強さなどです。そのような刺激要素、これを力動感と呼ぶことにしましょう。この力動感が自閉症の人にはどのように知覚されるのか、そしてその知覚によってどのような心理状態が引き起こされるのか、どのような行動を誘発されるのかを考えてみたらどうでしょう。

先日、外来に生後４ヶ月の乳児を連れて受診されたお母さんがおられました。自閉症ではないかと不安を真剣に訴えられていました。視線を回避するというのです。実際にお母さんがあやすと明瞭に視線を回避します。私がしばらくあやしてみると視線を合わせてうれしそうに微笑みます。もう一度お母さんにあやしてもらいました。それを観察していて乳児が視線を回避するのがどうしてかなんとなく分かったように思いました。お母さんのあやし方は実にせかせかとして不安に満ち満ちた表情で、緊張の強い雰囲気を醸し出していました。だれでもそのような雰囲気から逃れたくなるでしょう。乳児が視線を回避したのもうなずけるわけです。

さてここで注意を喚起しておきたいのですが、このように話したからといって親の育て方が悪いから子どもがそうなったと言っているのではありません。私は自閉症に限らず、この乳児にも恐らくは非常に過敏な気質といった生物学的な何らかの脆弱性（これを単純に弱さといっていいかは疑問ですが）を持っているのは否定しがたいでしょう。だからちょっとした環境の変化に敏感に反応してしまい、相手に身を委ねたり、甘えたりするといった愛着行動が容易にはとれにくいのでしょう。とても育てにくい、難しい子どもだろうと想像されます。先の乳児は自閉症の例として出した訳ではありませんが、自閉症に限らず敏感な子どもでは、乳児に特徴的な知覚の働きでもってわれわれの働きかけのどのような要素に敏感に反応しているのかが

お分かりいただけたのではないでしょうか。

子どもの内（内的世界）と外（母と子のあいだ）

これまでお話してきた具体的な母子間のコミュニケーションの姿は実は母親の側に起こっている現象ではなく、かといって子どもの側に起こっている現象でもないのです。母と子のあいだに起こっている現象であるというのが正確に実態をもっとも言い得ているように思います。

そろそろ話も結論に近づいてきました。今日のタイトルは、自閉症の人々の内と外を考えるというものでした。内とは子どもの内的世界をさしています。外とはここでは母子関係であれば、母と子のあいだをさしていますし、治療者でしたら、治療者と子のあいだをさしていると考えてください。自閉症の人たちとのコミュニケーションにおいてはこれまでお話してきたような現象が生き生きと常に生まれ、その現象に非常に敏感に反応しているのが自閉症の人々であると考えてみたいと思うのです。そのような現象によって彼らにどのような心理状態、行動が引き起こされるのかを考えてみたいのです。

自閉症という障害を持っている人は異常なほどの不安や恐怖に支配されています。そのような心理状態にあって今日お話したような対人関係における刺激状態にさらされたらどのような状態が引き起こされるのでしょうか。まるで夜道を歩いていて一本の縄を発見したときに起こる知覚のあり方と類似した知覚が生じやすくなるのではないでしょうか。私はそのような現象を臨床現場で頻繁に観察してきました。そのような現象を私は知覚変容現象と称して学術論文として発表しました。実は治療によってこれまで不安を引き起こすばかりであったような刺激が今度は逆転して実に快的な刺激に変わっていくことも事実です。心身の状態が健全であれば、環境刺激が快的な色彩を帯びてくるのは、風邪を引いた時とは正反対の恋愛まっただ中の状態ですとか、難関の大学入試に合格した当日の心境などを想像してみたら少しは理解が容易になるかもしれません。

では情動的コミュニケーションでの体験が子どもの内的世界にどのような体験として蓄積されていくのでしょうか。ここで最初にお話した強度行動障害の例について思い起こしてほしいと思います。食事の時、排泄の時、就寝の時などの本来ならば心地よいと思われる時にも激しく自傷を起こす行動障害がどうして起こるのでしょうか。

われわれは、自閉症の人たちの行動に対処する際に、ややもするとどうしても否定的な態度で接します。そんなことをしてはだめじゃないの、そんなことをしてはいけませんなどといった気持ちで接します。言葉では表現しなくても態度にはそのような雰囲気が醸し出されていることが多いでしょう。そしてわれわれにとって好ましい行動を取るように指示するようになり

ます。至極当然の話かもしれませんが、このような関係が非常に強まってしまうとどうなるのでしょうか。

自閉症の人の行動の取り方は衝動的であったり、唐突であったりするために、彼らの行動の背景にどのような動因（動機）が存在しているのか、分かりづらいものがあります。そのためもあっていかなる動因であろうと行動で示されるものはすべてが社会生活上では好ましくないものとみなされ否定されやすくなります。するとこうした体験は彼らの心の中にはどのように映って蓄積されていくのでしょうか。いかなる動因でもって行動しようとすべてが否定されるような体験の蓄積が起こると、当然動因そのものが否定されることになりましょう。本来ならば否定されるものでもないような動因（たとえばある物にとても興味をそそられたのでいろいろと試してみたい、ある人と関係が持ちたい、おなかがすいたので何かを食べたいなど）でも何か心が動かされると自らすべて否定的に反応するようになってしまうようになるのではないでしょうか。

コミュニケーションはどのように発達していくか

ここでどうしてもコミュニケーションの発達はどのように進展していくかを説明しておく必要があります。乳児と養育者の関係を思い描いてみて下さい。乳児が最初に自己主張するのは泣くことです。不快なことがあると泣いて自己主張（？）します（そのようにわれわれには感じられます)。養育者はなぜ乳児が泣いているのかを本能的に察知して、おなかがすいたねとか、おむつが濡れて気持ち悪いねと乳児に話しかけながら気持ちよくなるように母乳を与えたり、おむつを取り替えたりして介助します。そのあと乳児が気持ち良さそうな心地よい声を出し始めると、そうねうれしいね、気持ちいいのね、などと乳児の気持ちになりきって話しかけます。そんな母子間のコミュニケーションはよく考えると奇妙なものです。養育者がまるで乳児になったようにして話したりしています。恐らく乳児自身は自分の中に何が起こっているのか、どうして不快なのかはわかっていないでしょう。ただ不快な情動が生じてきます。そのために泣いているのでしょう。それに対して養育者はどうして泣いているのかを察知して、何々なので気持ち悪いとか悲しいのだとまるで乳児になったようにして語っています。このようなコミュニケーションの形態が実は人間の関係の始まりには見られるわけです。

さらに深まっていくと、子どもの仕草に養育者は子どもの気持ちに沿って仕草の意味を自分の生活に引き寄せて意味づけるようになります。最初は生理的な顔面の筋肉運動であった心地よい時の顔の動きがわれわれにとっては笑いという行動として受け止められ、それがわれわれにも心地よい情動をもたらし、思わず「そうね、うれしいね」などとさかんにあやしかけるよ

うになります。このような交流が蓄積していくにつれ、乳児の側にもこのような行動が心地よい時の反応としての笑いというものであることがなんとなく認識されるようになっていくのでしょう。

ここで大切なことは、乳児の気持ちがいまどのようなものかを感じ取って乳児の行動に反応していくことです。行動にはかならずなんらかの動因（明瞭でないときもあるでしょうが）が存在します。その動因にふさわしい行動としてわれわれが読みとって、そのような行動をわれわれの側に引き寄せて社会的行動へと強化していくわけです。乳児は対人交流を蓄積することによって初めて人間らしい振る舞いを身につけるようになります。そこで大切なことは、養育者が乳児の心の動きを本能的に察知できるような状況に置かれていることです。もし乳児の心の動きを察知できるような心理的ゆとりがなかったり、あることに囚われながら乳児の世話をしたらどうなるのでしょうか。

乳児の心の動きと行動、その社会的意味がわれわれのそれと可能な限り同じような状態であることが、社会生活を送る上でも、またその人自身の精神状態の健康度を考える上でも非常に大切なことです。もし、子どもの動因を無視して行動を一方的に修正して押しつけてしまったらどうなるのでしょうか。気持ちと行動の間で著しいギャップが生じてきます。気持ちとは裏腹な行動を引き起こしてしまうようになるかもしれません。

最初に配慮することは、まずはなぜ子どもがこのような行動を行おうとしたのか、を感じ取ることです。それを大切にしながら、何々したかったのね、何々したいのね、などと本人の気持ちになって子どもに投げ返してやることです。恐らくそんなことをしたら子どもは好き勝手してわがまま放題の子になってしまうと危惧する人もおられるでしょう。ここで強調しておきたいことは、その基盤になるのは愛着関係であるということなのです。つまりは情動的コミュニケーションが深まっていくような関係づくりをまずもって大切にしていきますと、子どもの気持ちの変化が手に取るように感じとれるようになります。たとえ自閉症といわれる子どもにおいても同じようなことが必ず起こります。その後しばらくすると子どもはわれわれと同じような振る舞いをしたがるようになっていきます。つまりは取り入れという心理的メカニズムが働くようになります。ですから情動的コミュニケーションの深まりを基盤にしていくことの重要性がお分かりいただけるのではないでしょうか。

人間みんな生まれて間もない時期には、自分の起こした行動がどのような意味（その社会でもつ意味）なのかはまったく分からないのです。それを受け止め応答する養育者がまるで鏡のように機能して、子どもは養育者の心の鏡を見ることによって自分の姿を理解していくようになるのです。ですからもしも養育者が子どもの心の動きを感じ取ることができないような関係

にあれば、子どもは自分のやっていることの意味を養育者の心から見いだすことができなくなります。しかし、子どもはわらにもすがりたいような心細い心理状態にありますから、どうしても養育者に依存していかざるをえないです。そのために気持ちと行動のあいだに大きなギャップも生まれてしまうことになるのです。このようなギャップが極度に酷い状態が強度行動障害ではないかと私は今のところ考えています。

子どもの気持ちが自由に伸び伸びと表現されるようになることが、われわれにとって彼らの気持ちを容易に感じ取るためにも大切です。そのためには愛着関係を基盤にして情動的コミュニケーションが深まっていくことが殊の外大切になります。子どもの主体性、能動性を大切にしていかねば、子どもの本来の情動の変化は察知しがたくなります。まずは快的な情動をしっかりと表出できるようにし、それをともにしっかりと感じ合うような関係づくりが基本になります。

このようなあまりにもわかりきったことが自閉症の臨床ではほとんど省みられていないのはどうしてなのでしょうか。自閉症という障害の原因追及を子どもの脳にのみあまりにも囚われてしまっていることも一つの要因ではないでしょうか。今日お話したように、関係性の問題、すなわちコミュニケーションの問題として自閉症を捉えてみたら少しは異なった発想が可能になるのではないでしょうか。十分には説明できませんでしたが、そろそろ終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

(1997. 12. 02)

追記：本稿は川崎市自閉症児者親の会講演会（1997.12.02）の内容をもとにまとめたものですが、当日の内容をわかりやすくするために大幅に加筆修正しています。したがって講演内容とは大幅に異なったものになったかもしれません。筆者の意図をお含みいただければ幸いです。